

水品

〔煎茶仕用集上〕辯水

和漢茶を好む人、水を撰を第一とす、水よからざれば、何程よき茶にても悪くなる也、陸氏より以來、水を論ずる事委し、鹽氣、金氣、濁水等は、云に不及、水の善惡甚多しといへども、先大ていの水にても、くみたてを、活水としてよしとす、何程名水にても、時刻を經たる水は用るに惡し。

〔煎茶仕用集下〕名水品彙

賀茂御手濯川城州洛外下賀茂社流水、斯泉華洛第一ノ水、別て烹茶によるし、其水甘く冷なり、菊水京祇園下河原にあり、水甚淡く
茂の水には明星水吉田洛外にあり、井水なり、菊水と云ものなり、以上飛鳥井京二條少將井門南炊御
手水井四條丸柳之水西洞院三條通醒井佐女牛通常盤井武者小路新清和水一條堀晴
明水上杜鵑井油小路通中立賣

右洛陽洛外大概之分擧之

合坂水天王寺西門之西湧泉也、浪華第一之水、又云、在栖清水新清水寺柳之水難波村の
今用逢坂字誤也、其處有合坂注、用此字可也、
波水南瓦屋愛宕水町井水黃金水御城内淀川長流

右大坂近邊之名水也

論水

本邦論名水書余○大枝流芳未見世上茶家者流の口談ニ云、千阿彌利休、山城宇治川の橋三の間の水、日本第一の水と定む、豊臣太閤常に汲之、茶の水に用ひ給ふと云、至今彼橋汲水所、別に附出し、ゑるしとす、利休が末流片桐石見守貞昌この水を汲、秤量二十錢目を以て分盈を作り、爾今點茶家者流に傳て、合約カフシヤと云、余これを傳て、諸方の水を量る分量大概左にゑるす、按るに、水輕重を以て好惡を論じがたし、山水乳泉石池の類に重きあり、雜穢混合して流る、川に輕きあり、これを按るに、長流水は水こなれ、濁氣少きものは輕し、乳泉の類にて、只今石間地中よりわき出たるものは、